

薬剤師を求めるための試験内容になっていくことは、火を見るよりも明かだ。“薬局に閉じこもり、処方せん通りにただ調剤だけをこなしていればいい薬剤師”が現在の医療現場で求められていないのと同じように、“過去問題の暗記だけの勉強方法”は現在の薬剤師国家試験には求められていない。どちらも“薬世界に長い間巣食っていた悪しき因習”にはかならない。

「求められているのは“自らの知識と意志で医療に貢献できる薬剤師”」、これが今後の薬剤師国家試験のキーワードであることは間違いないだろう。

【 寸 評 】

＜基礎薬学＞

全体としての難易度は高くない。有機化学は例年になく易しく、基本を理解していれば解ける問題が多い（これは今回の国家試験全般に言えること）。ただし、科目を越えた出題は例年になく多くなっている。例えば、従来は生化学で問われるビタミン、グルタチオンの化学的性質や、リン脂質に関することが有機化学の範囲で出題されていたりする。生薬の生合成が構造式の組み合わせで出題されていたり、ゲノムや癌遺伝子といった内容が問われていたり、今までとは異なるタイプの問題もいくつか目に付く。

＜衛生薬学＞

いつもより過去問題が多く、いくつかの過去問題（それも典型的な問題）を組み合わせて作成した問題も多い（これも今回の国家試験全般に言えること）。さらに10～20年前の古い過去問題も出題されていた。全体的に問われていることは難しくないが、考えて解かせる問題が多く、いわゆる衛生薬学の勉強法に良くある「過去問題の暗記」では対処が難しくなっている。

＜薬事関係法規・制度＞

やはり、過去問題を組み合わせて作成したような問題が中心。過去問題を理解していれば易しいが、ただ覚えているだ

けでは厳しい内容である。難易度的にはいつもと変わらないが、昨今の国家試験の特徴である「日本語の読解力」が解法に必要だ。

＜医療薬学Ⅰ＞

薬理学に関しては、構造活性相関に関する問題といった、今までとはタイプの異なる問題や、あまり使用されない薬物が出題されていた。しかし、全体的には点数を取りやすい問題が多い。薬物動態学に関しては、過去問題の延長・アレンジの問題が多く、過去問題の内容さえ理解していれば解ける問題がほとんどだった。

＜医療薬学Ⅱ＞

治療に関しては難易度的には高く、過去問題の知識だけだと7割くらいしかカバーできない。病態の把握ができていなければ解けない高度な問題が多い。薬剤師業務に関しては例年通りの難易度であり、例えば投与日数に関する問題なども出題されているが、これも2～3年前から毎回出題されている内容。製剤学に関しても、過去問題を組み合わせた問題が多い。問232、問233の生物検定の2問は難易度も高く、面食らった受験者も多かっただろうが、やはり過去問題の知識だけでは解けない問題だった。

医療系学生交流合同
セミナーを開催

共立薬科大学は、東京慈恵医科大学、首都大学東京、聖路加看護大学と共催で「医療系学生交流合同セミナー」を3月下旬に開いた。医学部や薬学部、看護学部などの学生が一堂に会し、討論するのは初めての試み。当日は約90人が参加、癌治療に関する2つのケーススタディについてワークショップ方式の討論が行われ、医療従事者間の連携の重要性について認識を深めた。同大学では今後も続ける方針で、早ければ今夏にも実施する予定。

医療現場ではチーム医療の重要性が認識されているが、相互の職種に対する認識不足や職種間の壁があることは否定できない。そこでその壁が低い学生の段階で、相互交流を進めることで、チーム医療に対する理解を深めるとというのが狙い。

今回のケーススタディは「抗癌剤の過剰投与」と、卵巣癌患者を焦点にした「患者の意志決定を支援する医療チームのコミュニケーションとは」という2つの事例がテーマに取り上げられた。「抗癌剤の過剰投与」では医師の独断による治療続行や病棟薬剤師の不在などの問題が示された。また、「卵巣癌患者の意志決定」では、患者に対する医師の説明が不親切、他の医療従事者のサポート不足といった状況が提示された。

事例紹介の後、小グループに分かれての討論と、全体討論が行われたが、学生からはいずれの事例についても、医療従事者がチームを作り、連携しやすい体制を構築して情報を共有する必要がある——といった意見が目立った。それぞれ全体討論後には教官から各事例の問題点や解決策などの解説がされ、より理解を深めた。

また、金沢大学病院内分泌・総合外科科長の大村健二氏が「病棟でのチームワーク（NSTの場合）」をテーマに基調講演した。病棟での栄養管理療法につき、同病院の実例を交えて講演。医師は栄養管理については必ずしも十分な知識を持ち合わせておらず、管理栄養士を含めた「Nutrition Support Team」（NST）構築の重要性を強調。栄養管理に伴う代謝性合併症の発症率を低下させる——などチーム医療のメリットを紹介した。



医療従事者間の意思疎通の重要性について討論

ポケット版
臨床
医薬品集
2007

編集責任
星 恵子

5月下旬
発売予定

薬事日報社

ポケット版 臨床医薬品集 2007 年版

■臨床診療に携わる医師が実際に使う立場で執筆！！

★本書の特長

- ① 分かり易い解説で日常診療に無理なく応用できる
- ② 治療ガイドラインや治療の手引きに沿ってまとめた
- ③ 使用頻度の高い薬剤を優先し検索も容易にできる
- ④ 短時間で薬剤の比較ができるように表を活用した
- ⑤ 携帯に便利なポケットサイズで見やすいレイアウト

編集責任 星 恵子
（昭和薬科大学薬物治療学教授、
聖マリアンナ医大難治研客員教授）

●A6判（ポケットサイズ） 2色刷り 約1,500頁
定価 4,200円（税込）

株式会社薬事日報社 <http://yakuji.co.jp/> 書籍注文専用FAX03-3866-8408